

省農薬米に対する消費者の評価

庄子悦子・井上眞弘・河野あけね

(宮城県農業センター)

Consumers' Evaluation to Rice under Low Agricultural Chemical Input

Etsuko SHOJI, Masahiro INOUE and Akene KOUNO

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center)

1 はじめに

消費者の農産物に対する健康・安全志向の高まりとともに、全国各地で有機農業や無農薬栽培などの取り組みも拡大しつつある。本報告は、米に対する消費者の購買意識と、農薬を削減して栽培した場合の購入意向や価格の価値観について調査した結果を分析し検討したものである。

2 調査対象及び方法

宮城県内の大型スーパーマーケット4店(仙台市、岩沼市)の各店舗の入口で記入・回収する方式でアンケート調査を行った(平成9年6月から7月にかけて実施)。回答者は704名であり、そのうち米を購入していると回答した消費者(一部購入を含む)595名について調査結果をまとめた。回答者は女性が約85%と圧倒的に多くなっている。その他、年齢や家族構成等は多岐にわたっている。

3 調査結果及び考察

(1) 消費者の米の購買意識

米の購入に際しての消費者の購買意識を調べた。評価基準としては「価格」、「安全性」、「味」の3点をレベル1とし、「味」を決める評価基準を「産地」、「銘柄(品種)」の2項目に分け、これをレベル2とした。

この各項目をAHP (Analytic Hierarchy Process) により一対比較して個人のウェイト(重要度)を計算し、これを基にして回答者全体の総合的なウェイトを算出した。その結果、「味」に43%、「安全性」に38%のウェイトがあり、「価格」は19%と低かった。消費者は米を「味」と「安全性」を重視して選ぶ傾向があるといえるが、「味」に影響する要素としては「産地」と「銘柄(品種)」をほぼ同程度とみている(図1)。

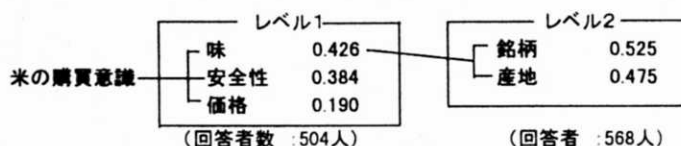


図1 米の購買意識についての AHP 分析結果

注. レベル1のウェイト値は整合比0.15未満の標本の幾何平均値。

同様に「安全な農産物の供給」と「農産物の安定供給」(この2項目の前提条件は図2の注釈のとおり)ではどちらを重視するかをAHPにより分析した。結果は、「安全な農産物の供給」が約70%のウェイトを占めており、消費者は米以外の農産物に対しても、より安全性を望んでいることが分かった。

(2) 省農薬米の購入意向と価格の価値観

米生産時の農薬を慣行より「50%削減」と「無農薬」の2段階に設定し(これらをあわせて省農薬米とする)、これらの米に対する消費者の購入意欲と購入価格の上限(許容できる最高価格)を算出した。購入価格の上限の質問には、選択肢方式で慣行栽培米価格の「1%増」から「200%以上増」までの20段階の上限価格を設けた。

農薬を削減して栽培した米の価格が高くなった場合の購入希望者は、「50%削減」の場合、「無農薬」の場合ともに回答者の約80%と多い(図3)。

また、購入すると回答した消費者の購入価格の上限の平均値は、農薬を「50%削減」した場合で慣行栽培米の価格

重視度	安全な農産物の供給	0.689
	農産物の安定供給	0.311
(回答者数 : 583人)		

図2 農産物供給の重視する点についてのAHP分析結果

- 注. 1) 「安全な農産物の供給」: 化学農薬等の使用をできる限り少なくし、生物にとって安全な農産物を生産するが、人手がかかり収量もあがらないため価格は高くなる。
2) 「農産物の安定供給」: 人手をかけず、化学肥料や農薬等を使いながら農産物をできるだけ安く安定的に生産すること。

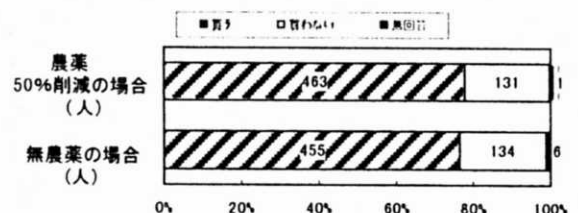


図3 農薬を削減して栽培した米の価格が高くなった場合の購入意欲

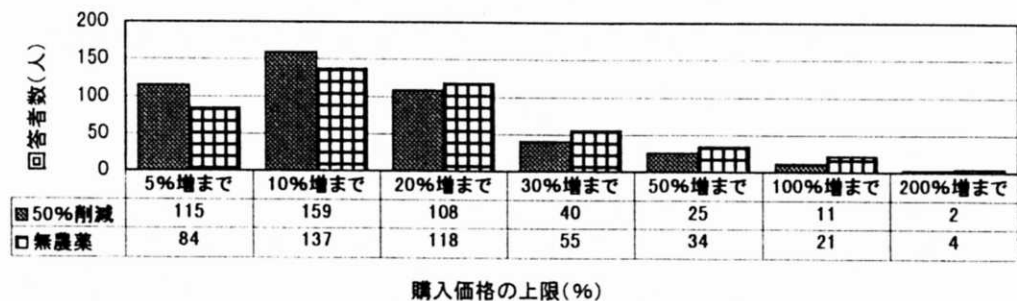


図4 農薬削減栽培米の購入価格の上限と回答者数

の16.5%増（慣行栽培米の価格を100とすると116.5）、「無農薬」の場合で慣行米価格の20.3%増である。なお、中央値は「50%削減」の場合で10%増、「無農薬」の場合で15%増であり、「50%削減」と「無農薬」の最頻値はともに10%増である（図4）。

4 ま と め

今回のアンケート調査により、消費者の米に関する購買意識と、省農薬米の購入意向とその価格価値観が明らかになった。

消費者の米を購入する際の評価基準は「味」「安全性」

に対するウェイトが高く、「価格」に対するウェイトは低かった。また、農薬の使用を少なくした、より安全な農産物を望んでおり、農薬使用を現行農法の半分以下にした米に対しては現在の購買価格よりも10%高く購入する意欲があることが明らかになった。

しかし、50%農薬削減の場合と無農薬の場合の許容する購入価格の上限が、ともに慣行栽培の価格の10%増と回答する回答者が最も多く、中央値も5%程度しか変わらなかった。これは、消費者が農薬の削減は重要視するが農薬の削減程度にはあまり関心がないことを示していることになるが今後なお、検討する必要があると思われる。